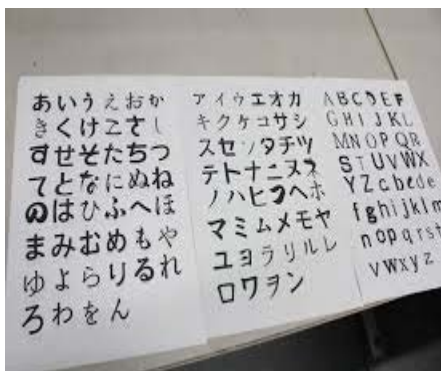


# スケール不変性の検証方法とDNA配列の解析

SP 10144 吉田俊介 非線形物理学研究室

# はじめに

我々の身の周りにはランダムな配列が多く存在している。



行の40	言語判定
01 85	合格 大丈夫です。
02 72	合格 大丈夫です。
03 38	合格 大丈夫です。
04 61	合格 大丈夫です。
05 51	合格 大丈夫です。
06 64	合格 大丈夫です。
07 25	合格 大丈夫です。
08 24	合格 大丈夫です。
09 51	合格 大丈夫です。
10 75	合格 大丈夫です。
11 13	合格 大丈夫です。
12 38	合格 大丈夫です。
13 92	合格 大丈夫です。
14 35	合格 大丈夫です。
15 45	合格 大丈夫です。
16 57	合格 大丈夫です。
17 74	合格 大丈夫です。
18 0	合格 大丈夫です。
19 71	合格 大丈夫です。
20 24	合格 大丈夫です。
21 42	合格 大丈夫です。
22 59	合格 大丈夫です。
23 12	合格 大丈夫です。
24 59	合格 大丈夫です。
25 43	合格 大丈夫です。
26 49	合格 大丈夫です。
27 17	合格 大丈夫です。
28 94	合格 大丈夫です。
29 48	合格 大丈夫です。
30 78	合格 大丈夫です。
31 48	合格 大丈夫です。
32 2	合格 大丈夫です。
33 78	合格 大丈夫です。
34 81	合格 大丈夫です。
35 48	合格 大丈夫です。
36 48	合格 大丈夫です。
37 12	合格 大丈夫です。
38 18	合格 大丈夫です。
39 47	合格 大丈夫です。
40 48	合格 大丈夫です。
41 72	合格 大丈夫です。
42 12	合格 大丈夫です。
43 21	合格 大丈夫です。
44 38	合格 大丈夫です。
45 32	合格 大丈夫です。
46 26	合格 大丈夫です。
47 100	合格 大丈夫です。
48 28	合格 大丈夫です。
49 91	合格 大丈夫です。
50 82	合格 大丈夫です。
51 4	合格 大丈夫です。
52 58	合格 大丈夫です。
53 88	合格 大丈夫です。
54 88	合格 大丈夫です。
55 77	合格 大丈夫です。
56 38	合格 大丈夫です。
57 1	合格 大丈夫です。
58 67	合格 大丈夫です。
59 9	合格 大丈夫です。
60 37	合格 大丈夫です。
61 81	合格 大丈夫です。
62 42	合格 大丈夫です。
63 74	合格 大丈夫です。
64 42	合格 大丈夫です。
65 88	合格 大丈夫です。
66 51	合格 大丈夫です。
67 48	合格 大丈夫です。
68 28	合格 大丈夫です。
69 20	合格 大丈夫です。
70 88	合格 大丈夫です。
71 52	合格 大丈夫です。
72 33	合格 大丈夫です。
73 3	合格 大丈夫です。
74 607	合格 大丈夫です。
75 88	合格 大丈夫です。
76 83	合格 大丈夫です。
77 1	合格 大丈夫です。
78 988	合格 大丈夫です。
79 0	合格 大丈夫です。
80 407	合格 大丈夫です。
81 71	合格 大丈夫です。
82 677	合格 大丈夫です。
83 58	合格 大丈夫です。
84 384	合格 大丈夫です。
85 388	合格 大丈夫です。
86 38	合格 大丈夫です。
87 52	合格 大丈夫です。
88 43	合格 大丈夫です。
89 27	合格 大丈夫です。
90 42	合格 大丈夫です。
91 1	合格 大丈夫です。
92 38	合格 大丈夫です。
93 39	合格 大丈夫です。
94 52	合格 大丈夫です。
95 2	合格 大丈夫です。
96 82	合格 大丈夫です。
97 20	合格 大丈夫です。
98 67	合格 大丈夫です。
99 22	合格 大丈夫です。
100 43	合格 大丈夫です。
101 472	合格 大丈夫です。
102 3	合格 大丈夫です。
103 75	合格 大丈夫です。
104 88	合格 大丈夫です。
105 96	合格 大丈夫です。
106 3	合格 大丈夫です。
107 81	合格 大丈夫です。
108 48	合格 大丈夫です。
109 84	合格 大丈夫です。
110 67	合格 大丈夫です。
111 19	合格 大丈夫です。

そのランダムな配列にも何かしらのパターンがあるかどうか調べるためにその配列を0,1の数値にして解析するという研究が行われてきた。

# 目的

```
ORGANISM Clostridium botulinum A2 str. Kyoto
1100111111101111101010011010011010001010100010111111111001001
101100011001010001001010101000011011101011110111010101000
101111000111110110000110000001100011010001011101111010000011
1000000001001000101101000001000111010000010001111001010100
01100000101100111101111111000001001110110000110011010110001
001111010000000011111000001000101000001111010011001011110000
110111011110000000101001010001111011010011011000000000010000
000001101001001000000111001010011010001001000010111011010110
001111000101011111001110111010010000001001001000111011101010
0101111001001001000011011101100010101001111110111010101001
000110011110010000111011100101010110011011011010110101001
001111000111100010011101010111111000000111010001000110011001
111010000001001000001010000111000001000101000001010001011110
110011001001011100111011011000000000000011100000000111111101
011111001010110101000011001000100010011010110001001101111110
000000101110111100000100011000111000111000100000111010011
0010111000101110011110000110000100110111100000000011001010
000000110001011111001000010010010101010011010000011000110001
0111010001100000000111110010000010010011111110110111011001000
```

図:実際の0,1数列にしたDNA配列

その従来の研究から0,1の数列のパターンは、  
ある長さ $L$ における1の個数の分布の分散 $V_L$ が $L$ のべき乗に  
従うことが知られてきた。

また、べき性を持つことからスケール不変性であることも同時にいえる。

本研究では、従来の方法ではなく新たな手法として  
相関関数のスケールリング解析を提案し0,1数列に変換された  
DNA配列がスケール不変性をもつかどうかを検証する。

# 発表の流れ

- スケール不変性とは？
- 従来の方法とは？
- 0、1の数列のスケール不変性とは？
- 相関関数のスケーリング解析とは？
- 検証結果

# スケール不変性とは？



図1:カリフラワー

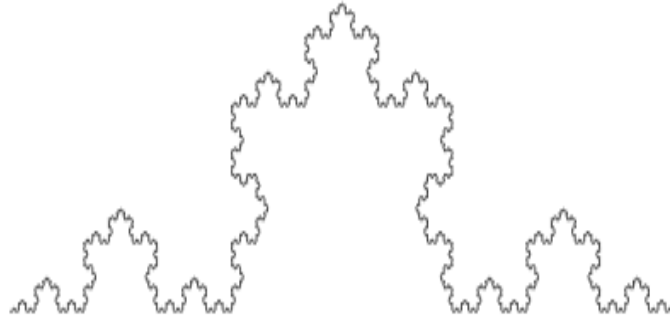


図2:コッホ曲線

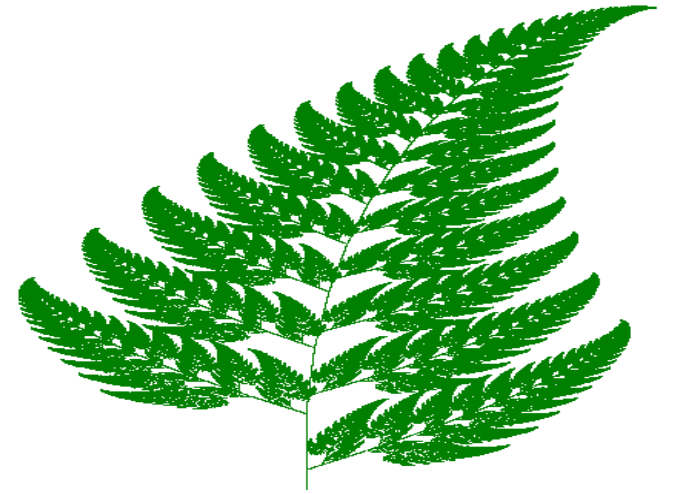
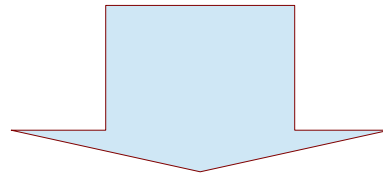


図3:シダの葉



一部を拡大しても全体に見え、縮小してもその一部と区別がつかない。

スケール不変性



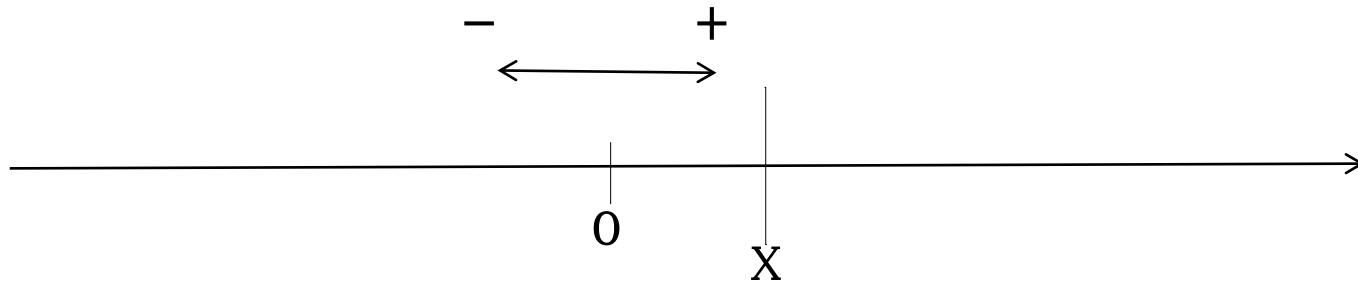


# 従来の方法の例

例 ランダムウォーク

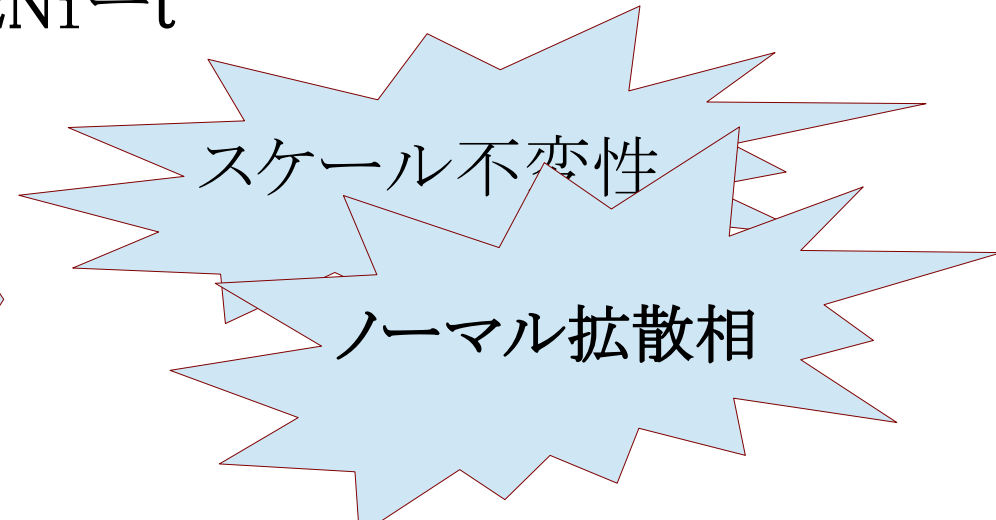
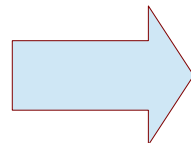
1の個数: $N_1$  右に1進む  
-1の個数: $N_0$  左に1進む

1秒ごとに  
確率1/2で1か-1か振る舞う



t秒後にいる位置 $X = N_1 - N_0 = 2N_1 - t$

分散 $V(X) = 4 \cdot V(N_1) \propto t$

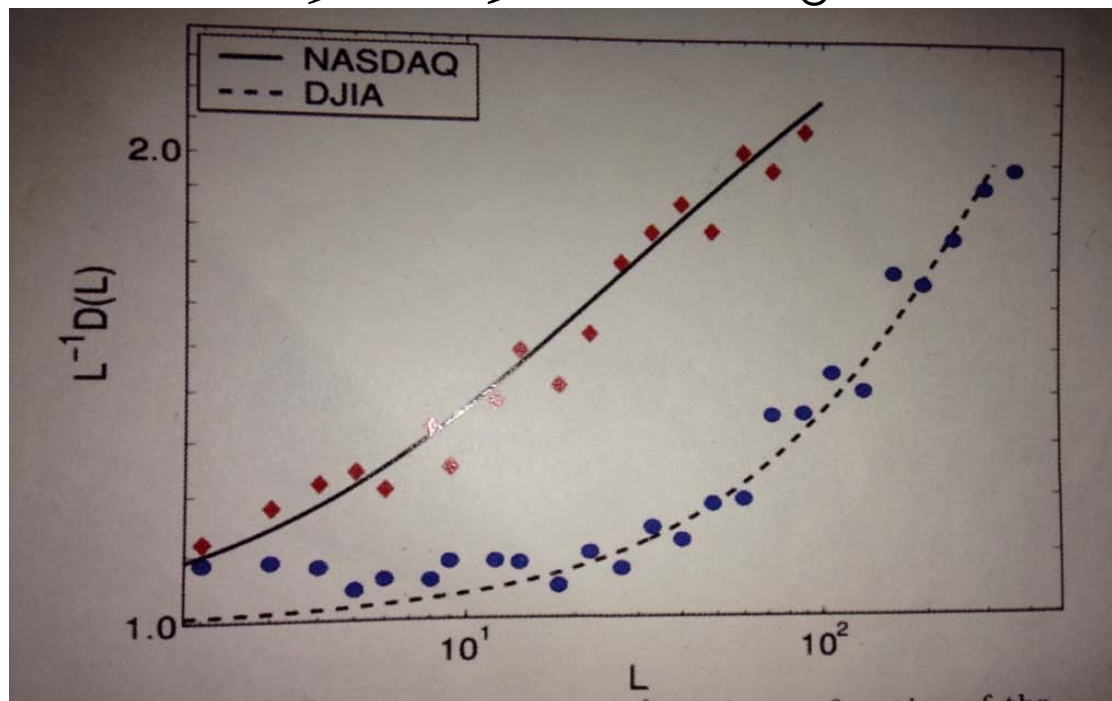




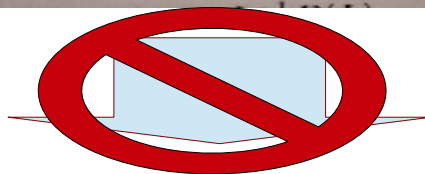


しかし、従来の方法だとバラつきが多いように見える。

縦軸  $L^{-1}D(L)$  における分散



横軸  $\log(L)$



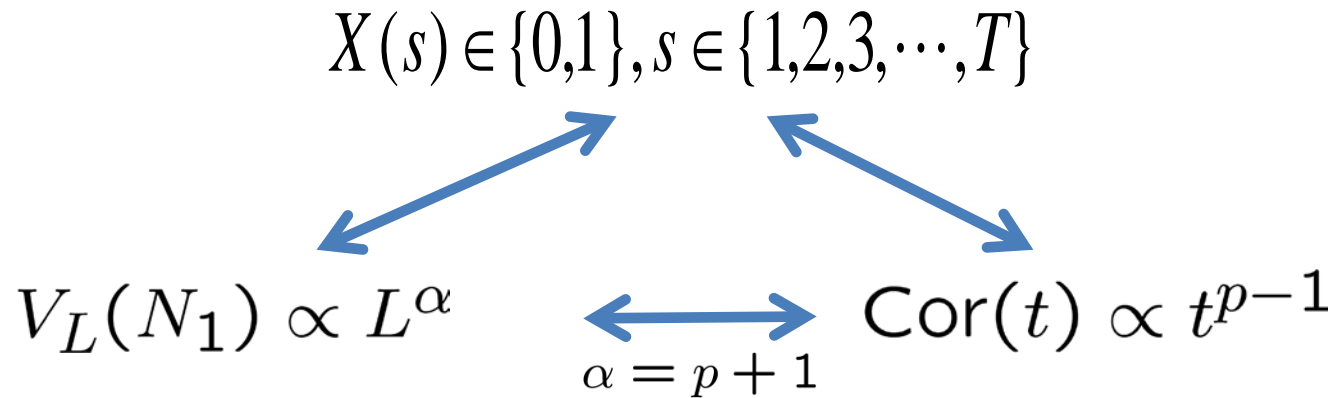
怪しい

図:株のべき性のグラフ

$$V_L(N_1) \propto L^\alpha$$

相関関数のスケーリング解析

## 従来の方法と相関関数の関係



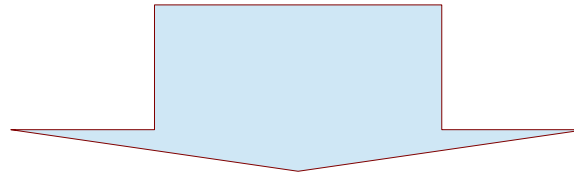
## 共分散

$$\text{Cor}(t) \equiv \frac{1}{T-t} \sum_{s=1}^{T-t} X(s)X(s+t) - \langle X(s) \rangle \langle X(s+t) \rangle$$

$$\langle X(s) \rangle \equiv \frac{1}{T-t} \sum_{s=1}^{T-t} X(s) \quad \langle X(s+t) \rangle \equiv \frac{1}{T-t} \sum_{s=1}^{T-t} X(s+t)$$

# 相関関数のスケーリング解析

DNA配列の相関関数  $\text{Cor}(t) \propto t^{p-1}$  として



積分相関時間(緩和時間)

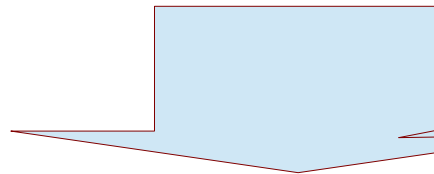
$$\tau(t) \equiv \frac{M_0(t)}{\text{Cor}(0)}$$

2次モーメント相関時間(相関時間)

$$\xi(t) \equiv \sqrt{\frac{M_2(t)}{M_0(t)}}$$

n次モーメント

$$M_n(t) \equiv \sum_{s=0}^{t-1} \text{Cor}(s) s^n$$



もし、スケール不変性なら

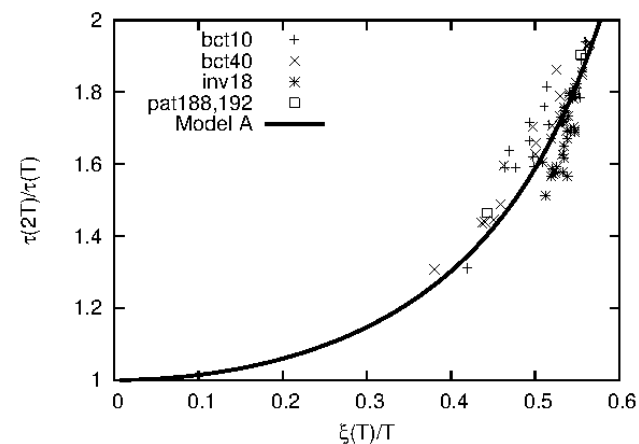
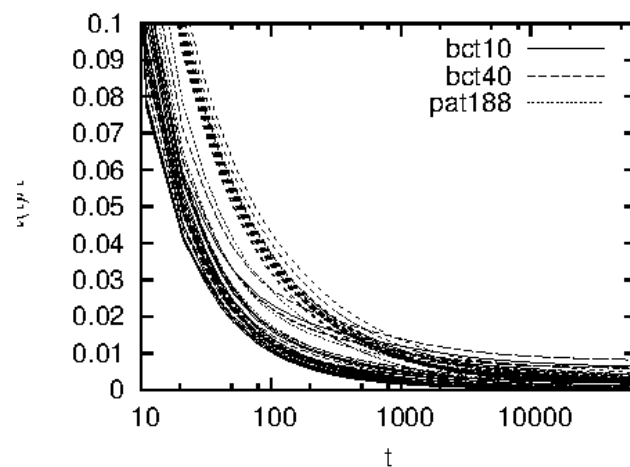
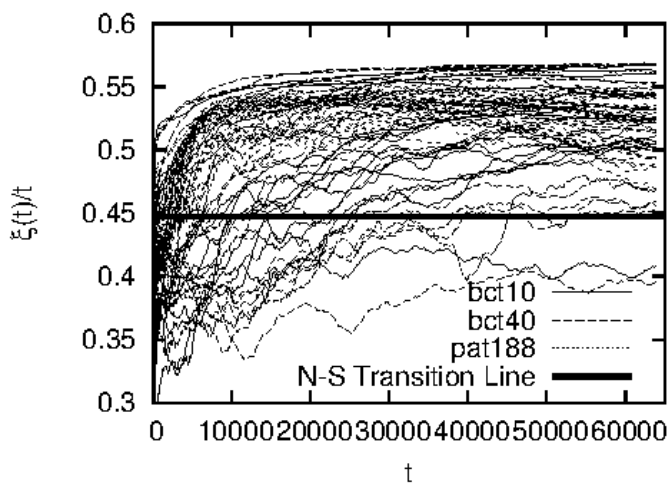
$$\lim_{t \rightarrow \infty} \xi(t)/t = \sqrt{\frac{p}{p+2}}$$

$$\lim_{t \rightarrow \infty} \tau(t)/t = 0$$

$$\frac{\tau(2t)}{\tau(t)} = 2^p$$

となることが分かっている。

# 解析結果



## 結論

(1) 相関関数のスケーリング解析により、DNAはスケール不変性をもつものが存在することが検証でき、本手法の有効性が確かめられた。

(2) 相関時間 $\xi/t$ の極限值から、相関が非常につよく、スケール不変なものはほとんどスーパー拡散相にあることが分かった。

(3) 解析したものには明らかにスケール不変でないものも多い。スケール不変性の生物学的な意味は不明である。

● 終わり

0, 1配列でのスケール不変性の検証方法

$$X(t) \in \{0, 1\}, t \in \{1, \dots, T\}$$

$$V_L(N_1)$$

$$V_L(N_1) \propto L$$

$$V_L(N_1) \propto L^\alpha$$

$$\alpha = p + 1$$

$$\text{Cor}(t) \propto t^{p-1}$$

$$V_L(N_1) \propto L$$

$$V_L(N_1) \propto L^\alpha$$

$$\lim_{t \rightarrow \infty} \xi(t)/t = \sqrt{\frac{p}{p+2}}$$

$$\lim_{t \rightarrow \infty} \tau(t)/t = 0$$

$$\frac{\tau(2t)}{\tau(t)} = 2^p$$

$$\text{Cor}(t) \equiv \frac{1}{T-t} \sum_{s=1}^{T-t} X(s)X(s+t) - \langle X(s) \rangle \langle X(s+t) \rangle$$

$$\langle X(s) \rangle \equiv \frac{1}{T-t} \sum_{s=1}^{T-t} X(s)$$

$$\langle X(s+t) \rangle \equiv \frac{1}{T-t} \sum_{s=1}^{T-t} X(s+t)$$

n次モーメント

$$M_n(t) \equiv \sum_{s=0}^{t-1} \text{Cor}(s) s^n$$

積分相関時間(緩和時間)

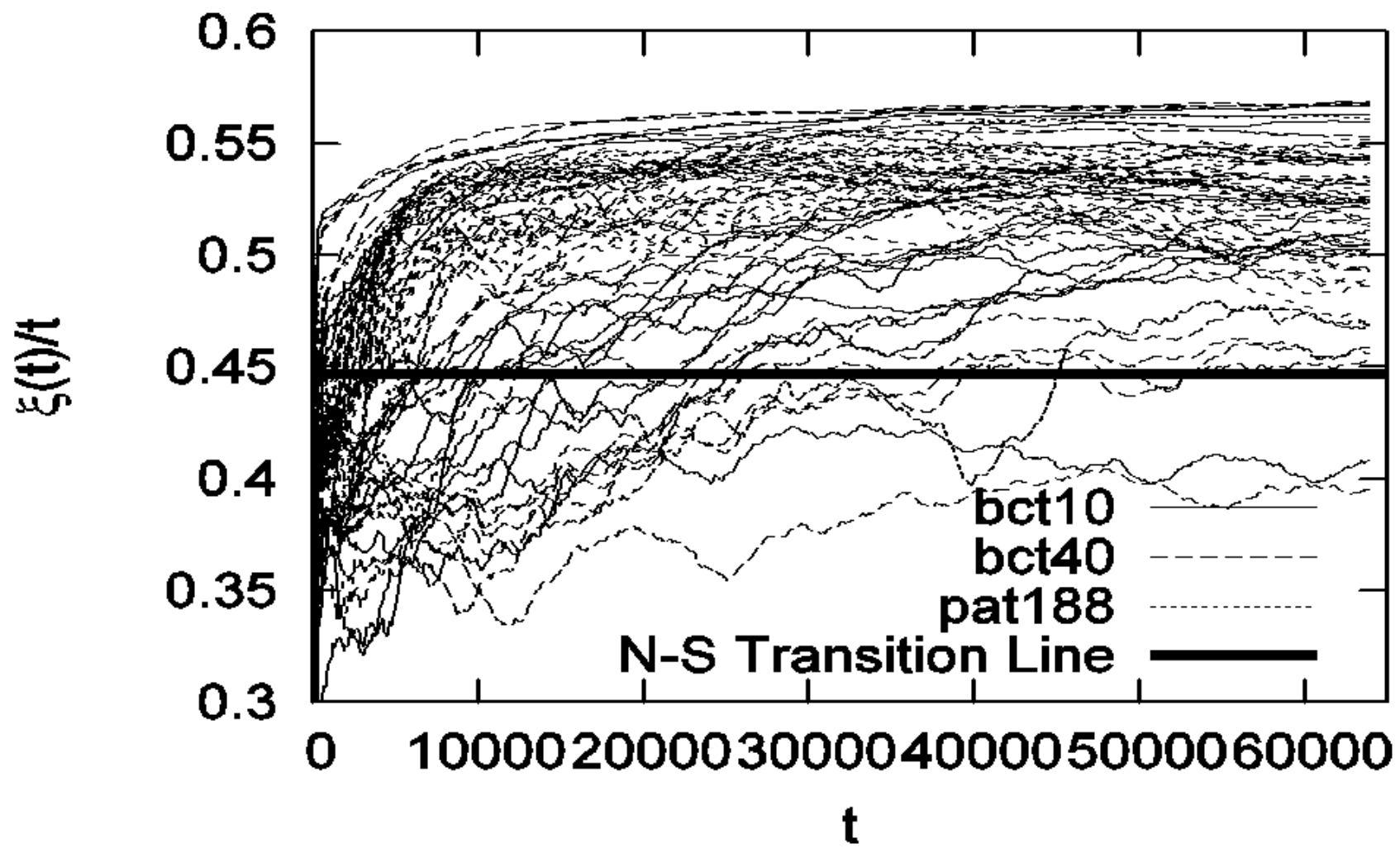
$$\tau(t) \equiv \frac{M_0(t)}{\text{Cor}(0)}$$

2次モーメント相関時間(相関時間)

$$\xi(t) \equiv \sqrt{\frac{M_2(t)}{M_0(t)}}$$

# 結果1

(相関時間  $\xi(t)$ ) / t





0, 1配列でのスケール不変性の検証方法

$$X(t) \in \{0, 1\}, t \in \{1, \dots, T\}$$

$$V_L(N_1)$$

$$V_L(N_1) \propto L$$

$$V_L(N_1) \propto L^\alpha$$

$$V_L(N_1) \propto L$$

$$V_L(N_1) \propto L^\alpha$$

$$\text{Cor}(t) \propto t^{p-1}$$

$$\alpha = p + 1$$

$$\lim_{t \rightarrow \infty} \xi(t)/t = \sqrt{\frac{p}{p+2}}$$

$$\lim_{t \rightarrow \infty} \tau(t)/t = 0$$

$$\frac{\tau(2t)}{\tau(t)} = 2^p$$

$$\text{Cor}(t) \equiv \frac{1}{T-t} \sum_{s=1}^{T-t} X(s)X(s+t) - \langle X(s) \rangle \langle X(s+t) \rangle$$

$$\langle X(s) \rangle \equiv \frac{1}{T-t} \sum_{s=1}^{T-t} X(s)$$

$$\langle X(s+t) \rangle \equiv \frac{1}{T-t} \sum_{s=1}^{T-t} X(s+t)$$

n次モーメント

$$M_n(t) \equiv \sum_{s=0}^{t-1} \text{Cor}(s) s^n$$

積分相関時間(緩和時間)

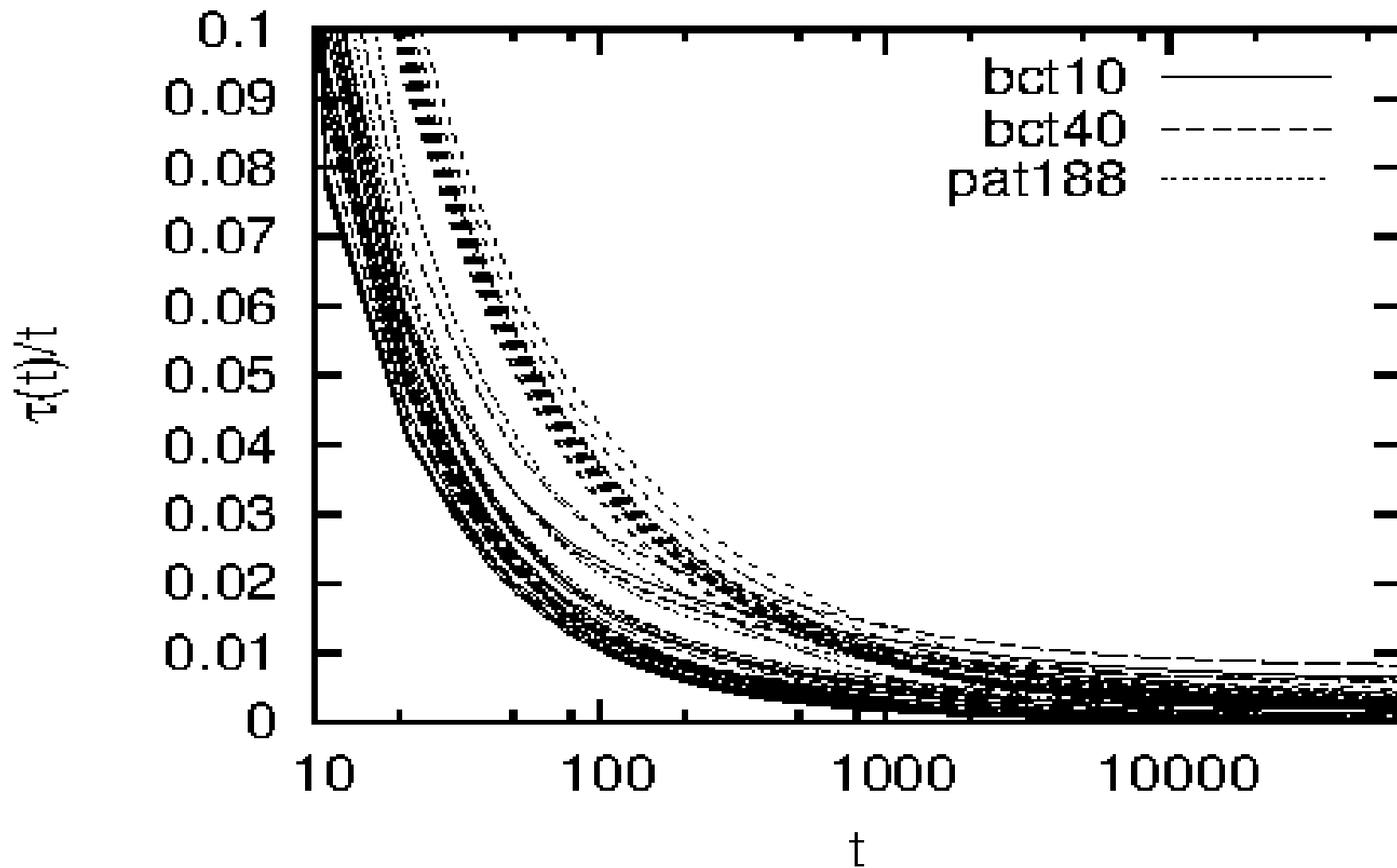
$$\tau(t) \equiv \frac{M_0(t)}{\text{Cor}(0)}$$

2次モーメント相関時間(相関時間)

$$\xi(t) \equiv \sqrt{\frac{M_2(t)}{M_0(t)}}$$

# 結果2

(緩和時間  $\tau(t)/t$ )



# 結果3

